巻頭言

副学長に就任して思ったこと



滋賀医科大学副学長（教育研究等担当理事）
堀池　喜八郎

私が教育･研究等担当理事としてつとめたこの２年ほどの間に、人の心情的なことについて特に感じたことを述べます。

○たとえば世界平和について議論しているとします。個々の人が正義を主張します。たしかに正しいけれど、じゃあ、いま具体的に私たちはどうするのか、それは実行できるのか、実現可能なのか。議論はとかく正しいことにいって、適切なことにいきません。このことを竹内洋氏（関西大学教授・京都大学名誉教授）は「我々の職業病」であるといい、「世の中、正しいことと適切なことは違う・・・、現実にどう対応していくかというのは適切なことなわけです。」といっています（近畿地区大学教育研究会 基調講演。一部改変）。いつも正しいことが適切なわけではありません。また実務においてはロマンチシズムとリアリズムの区別も大切であることを実感しました。

○風が吹けば桶屋が儲かるという成句があります。大風→土ほこり→盲人→三味線→ネコ→ネズミ→桶という可能性のほとんどない因果関係を順々につなぎ、とんでもない結論を主張します。一つの過程の確率を１％とすれば、２段階の過程では１万分の１になり、80％としても３段階では可能性は 50％に低下します（0.8×0.8×0.8＝0.512）。主張している人は各段階の確率を１と仮定していることを自覚していません。可能性だけでなく、蓋然性をふまえて定量的に議論することの大切さも痛感しました。

○たとえば「この頃の学生は××である」と意見を述べている。対象の「学生」は何を指しているのでしょうか。学生全般を装いながら実際は個別的あるいは特殊例である場合がよくあります。医学生･看護学生、男性･女性、教養課程･専門課程、できる学生・できない学生、まじめな学生・そうでない学生、・・・など、その背景や状況を詳細に確認しないと適切な結論になかなか至らないことがあります。

看護や医学は直接的に人を対象とする分野であり、学問的に正しいことと現場で適切なことが一致しないことがあります。しかも十人十色です。こういう点をしっかりと認識し、蓋然性を念頭においてことに当たることは重要です。

ともあれ、発言も含め人の行動の背景には感情・欲望があることも踏まえて、日々生じる事案や課題に対して、（正しく）適切に、またぶれずに対処していくことは大切であると強く思いました（当面の問題解決）。同時にバックキャスティングによるビジョンの設定もしっかりとしなければならないと痛感しました。

平成 27 年 12 月